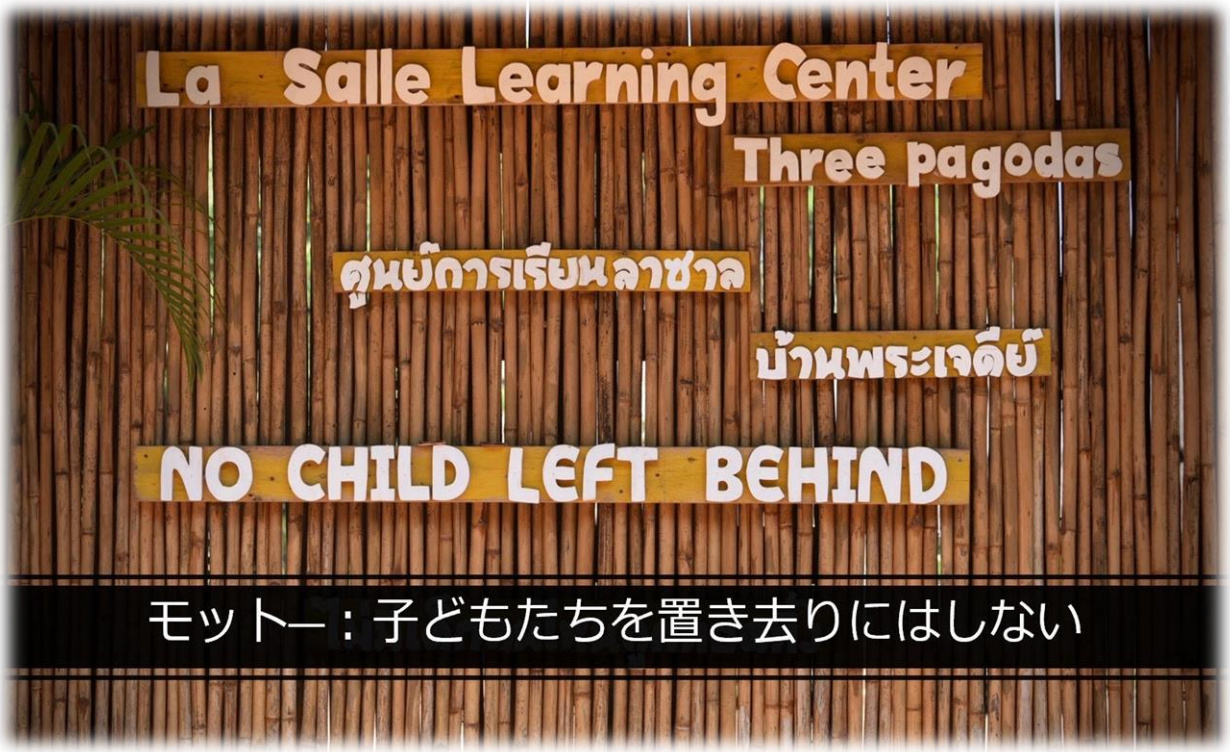
札幌教区青少年委員会主催 2023 年度高校生タイボランティア

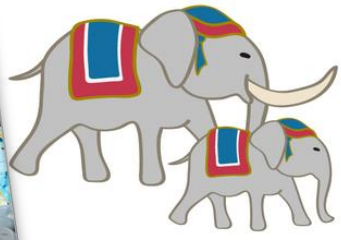
帰国報告集

25 July - 4 August 2023



★Member

NO	学校	学年	氏名	性別
1	遺愛女子	3	阿部 莉々加 （RIRIKA ABE）	WOMAN
2	遺愛女子	3	上貞 友鶴 （YUZU UESADA）	WOMAN
3	遺愛女子	3	森　未衣 （MEI　MORI）	WOMAN
4	旭川藤星	3	田村　美月 （MIZUKI TAMURA）	WOMAN
5	函館ラ・サール	3	佐藤 達三郎 （TATSUSABURO SATO）	MAN
6	函館ラ・サール	3	鈴木　蓮 （REN SUZUKI）	MAN
7	旭川藤星	2	北畑　奏音 （KANON　KITAHATA）	WOMAN
8	旭川藤星	2	佐藤　葵 （AOI SATO）	WOMAN
9	函館ラ・サール	2	岩本 勝太郎 （SHOTARO IWAMOTO）	MAN
10	函館ラ・サール	2	奈良　敢太 （KANTA NARA）	MAN
11	函館ラ・サール	1	皆山　雄太 （YUTA KAIYAMA）	MAN
12	函館ラ・サール	1	永坂 慎一朗 （SHINICHIRO NAGASAKA）	MAN
13	函館ラ・サール	1	武藤　悠真 （YUMA　MUTO）	MAN
責任者	函館ラ・サール	函館ラ・サール	韓　徳 （John Bosco DEOK　HAN）	MAN
引率	函館ラ・サール	函館ラ・サール	酒井　亮 （MAKOTO SAKAI）	MAN
引率	函館ラ・サール	函館ラ・サール	菱井　慧 （SATOSHI HISHII）	MAN

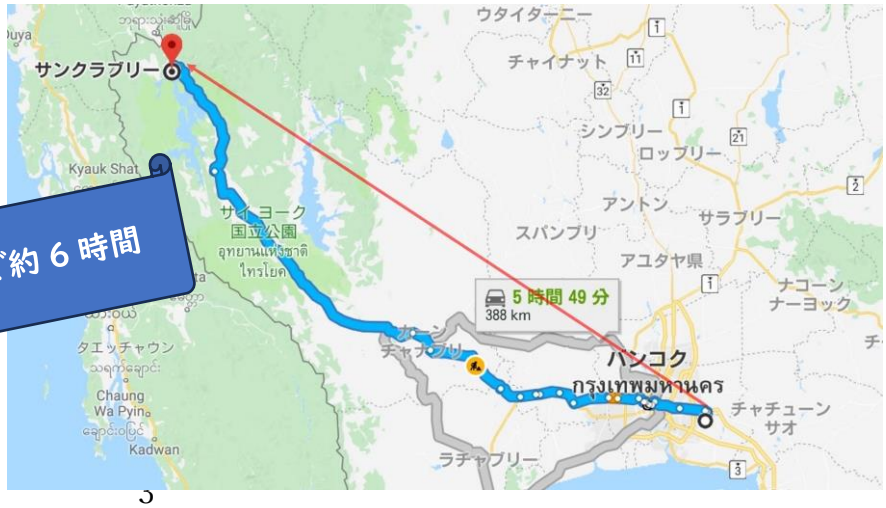


★主なスケジュール

July 25, Tuesday		Notes
2:00pm	新千歳空港集合	
4:00 pm - 7:15 pm	新千歳発→台北着	EVE Air BR0115
8:45 pm - 11:30 pm	台北発→バンコク着	EVA Air BR0205
July 26 Wednesday		**Notes**
1:30 am	La Salle College-Bangkok 着	
12:00 pm – 5:00 pm	ランチ、ショッピングモールで買い出し	
6:30 pm	宿泊所で夕食	
8 : 00 pm	日本グループの仮授業練習	
July 27, Thursday		
8:00 am	フラッグセレモニー	
8:30 am – 9:30 am	寺での儀式参列	
10:00 am – 15:00 pm	グループごとの発表授業	
3:30 pm	3 日間の振り返り	
July 28, Friday		**Notes**
11:00 am	Blue Sky Kids のもとへ訪問	
11:00 am – 1:00 pm	食料をもって 14 家族が住む村へ歩いて訪問	
3:00 pm	Parmeny Blue Sky Home 訪問	
7:30 pm	分かち合い	
July 29, Saturday		**Notes**
9:00 am	Three Pagodas Pass、マーケットを訪問	
5:00 pm	Mon Bridge Festival に参加	
July 30, Sunday		**Notes**
10:30 am	ほうき、お好み焼き作り	
2:00 pm	現地の日本人訪問	
4:30 pm	Blue Sky Kids とバレーボール	
July 31 , Monday		**Notes**
8:00 am	レモンの木を植える	
5:30 pm	4 日間の分かち合い	

August1 , Tuesday		Notes
11:30 am	Bamboo School にて昼食	
1:00 pm	Under Water Temple を訪問	
4:00 pm	お別れ会の準備	
6:00 pm	Permeny にてお別れ会	
August2, Wednesday		**Notes**
9:00 am	Elephant Camp に向けて出発	
12:00 pm – 3:00 pm	Elephant Camp 体験	
6:30 pm	Lasalle Bangkok 到着	
August3, Thursday		**Notes**
8:00 am – 10:15 am	Lasalle Bangkok、カテドラル見学	
August4, Friday		**Notes**
1:45 am – 6:30 am	バンコク発→台北着	EVA Air BR0206
10:10 am – 3:00 pm	台北発→新千歳着	EVA Air BR0116
16:00 pm	新千歳空港にて解散式	

新千歳空港→台北空港→バンコク空港



バンコク→サンクラブリーまで車で約 6 時間

バンコクへ出発！

日本語で名札を作成中

現地の子どもたちと
お好み焼き作り

食料を村まで歩いて運びました

ほうき作り

レモンの木を植える

★引率者より

「『No Child Left Behind』（どの子も置き去りにしない）」

函館ラ・サール高等学校教諭　ヨハネ ボスコ 韓 徳

2020 年に予定されていたタイボランティアは、新型コロナウイルスの影響により 3 年連続で中止となり、3 年の月日を経て今年実施されました。

2019 年の夏に一人で下見に行った時の景色とは多少変わってしまいましたが、 今回、何事もなく 11 日間過ごし、帰国できたことに感謝しています。

今回のスケジュールは、タイ現地の担当者の異動によって大幅に変更を 余儀なくされました。これは、私たちに提供したい内容が人それぞれ異なるためでしょう。現地では「Up to you」という表現がよく使われます。これは「あなたにお任せします」という意味です。実際、しおりを振り返ると、唯一変更がなかったのは離着陸の部分だけで、それ以外は現地で早朝、昼、夕方の打ち合わせを経て、参加者に連絡、そして活動を行うという形で進行しました。自分のペースで動くことに慣れている私たちにとって、相手のスケジュールに合わせることは、人間関係においても同じように重要なことだと思います。

「自分の持ち物を一切捨てないならば、あなたがたのだれ一人としてわたしの弟子ではありえない。(ルカ 14・33)」

これは、個人の利益や欲望を捨てて、他者のために尽くすことの大切さを示しています。これは、「Up to me (私に従う)」から「Up to you(あなたに従う)」への変化を表しているかもしれません。自分の心、才能、思いを他者のために捧げることが、この言葉の本質だと思っています。 「主よ、わたしをあなたの平和の道具としてお使いください。」 タイだけでなく、日本でも同じです。出会う人々、向き合っている人々、そして自分が誰の ために生きているのか、ということが大切です。今回のタイボランティアでは、多くの子どもたちが無国籍で、出生証明書も発行されていない状況の子どもたちでした。親たちは子どもを育てることができず、育児放棄せざるを得ない状況下にある子どもたちです。そうした状況でも子どもたちは私たちに歩み寄り、笑顔を見せてくれます。幸せとは何だろうか。それは、あなたの隣にいるだけで言葉にできない何かを共感することです。今回、参加したことで、何が重要で、何を選び、何がで きるのかを考え、自分から何か行動できるなら大きな意味があるのかもしれません。今回 16 人の中にカトリック信徒は私だけでしたが、共に祈り、共に歌い、共に食事をすることができたことは大きな恵みでした。最後に、毎回食事前に歌っていた歌詞を共有したいと思います。

「主よ、あなたの愛の力で、私の心を、ともし愛せるように強めてください。（ラズベリー)」

「ブラザーからの学び」

函館ラ・サール高等学校　教諭　菱井慧

私は函館ラ・サールに勤めて１３年になりますが、“カトリックの精神”についてほとんど理解できていないと思います。今もそうだと思います。ですが、このタイボランティア活動を通して、少しわかったことがあります。それは３００年前の聖ラ・サールの想いは今も変わらずここにあるということです。そして、私はそれに深く共感しています。そんなことはタイに行かなくてもかわるではないかと思われるかもしれません。そうなのかもしれません。しかし私は理解していなかった。タイに行って、ブラザーや子どもたちと関りをもつことで今まで理解していなかったカトリックの精神（ラ・サールの想い）が見えたように思います。

ある生徒が Br.Philip に質問をしました。「なぜここで働いているのですか？」その質問に Br.Philip は「300 年前にフランスでラ・サールが経験したことがここにあるから」と答えました。私たちが訪れた地域は貧困問題だけでなく、国籍や民族の問題もあり、苦しんでいる子どもたちがたくさんいます。その子どもたちのためにすべてをささげて行動している人たちに会いました。函館ラ・サールではラ・サールの理念として“Special care for the poor.”という言葉を何度も耳にしていました。タイに来てその意味が少し変わりました。Blue Sky Home の校舎の壁には大きく“A Lasallian school for the Lost, the Last, the Least”と書かれていました。「ラ・サールの学校は、失った者、最後の者、もっとも小さい者のためにある」。日本語に訳すのは非常に難しいと感じました。“Special care for the poor.”も訳すのは難しいと感じています。私自身のこの言葉の意味の範囲が変化したからだと思います。

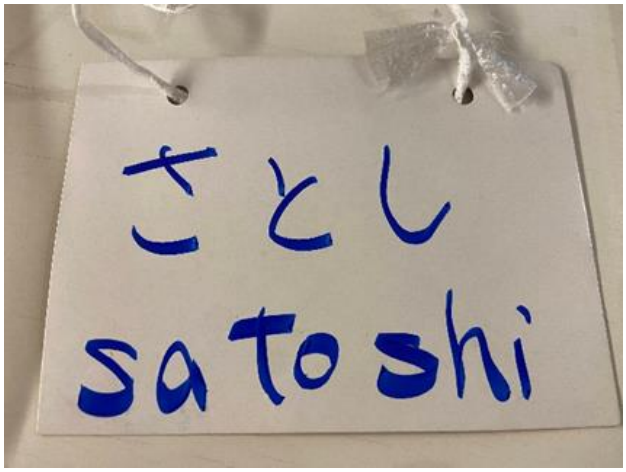
Bamboo School で子どもたちと名札を作ったとき、私は自分の名札にひらがなで「さとし」と書き、その下にローマ字で「Satoshi」と書きました。子どもたちはどちらも読めない。Bamboo School の生徒がミャンマー語で「さとし」と発音する文字を書いてくれました。すると子どもたちはその文字を読んで「さとし」と発音してくれました。Blue Sky Home ではタイ語も追加して、最終的に私の名札には４種類の文字（ひらがな・ローマ字・ミャンマー語・タイ語）で「さとし」と発音する文字が書かれていました。名札を指さして「さとし」と言うと、子どもたちはよろこんで「さとし」と呼んでくれました。そして、笑顔で彼らは自分の名前を教えてくれました。オデン、ラーマイマイ、フィアピー…。その他にも様々な活動を通して、言葉や立場は関係なく、「私」と「あなた」のつながりを感じることができました。

子どもたちは自分たちの文字・言葉を大切にしながら、将来、タイで生活するためにタイ語を勉強しています。タイでは無国籍の子どもたちが教育を受けることは認められているものの、政府からの支援はありません。日本にいる私たちにとって大切なことは彼らのために何ができるのかを考えることです。ずっと一緒にタイにいることは難しいでしょう。再度タイに行くことが困難になることもあるかもしれません。Br.Philip は「いのり続けることはできます。それは私たちの願いです」と言ってくれました。私はこのつながりを多くの人に知ってもらいたいと思いました。ラ・サーリアンだけではなく、カトリックだけではなく、より多くの人にこの子どもたちの笑顔とブラザーたちの想いを知ってほしいと思います。私も教師としてブラザーのようでありたいと思いました。

最後に Br.ジョーの言葉を載せます。

I love poor people.
I like to help them.
I like to serve them.
I like to teach them, educate them.
I want them to learn Thai.
And when they grow up, they can find work.
And nobody can deceive them.
That is very important.
We cannot give money all the time.
SO, it is the best way to do is to keep education.
I love them.
Whenever I see the poor children, I cry.
That is my life.
Thank you.

私は感動しました。



★参加者より

「本当の幸せとは～タイボランティアを通して思ったこと～」

遺愛女子高等学校３年 阿部莉々加

もしあなたにとって当たり前だったことが決して当たり前ではないということに気づいたらあなたは何を思うだろうか。私はこの夏そのことに深く気づいたのです。私は日本とはかけ離れた土地で決して忘れられない貴重な経験をしました。私を含めた高校生 13 人と教員 3 人は異国の地タイに降り立ちました。私はこのときこれからどんなことが待ち受けているのか想像がつきませんでした。私たちがタイに着き、向かった場所はタイとミャンマーの国境にあるサンクラブリー。 私たちが見える山々の先にはミャンマーが広がっていました。この地で私たち 16 人のボ ランティアメンバーは濃い 10 日間を過ごしました。その中でも私は特に記憶に鮮明に残り、貴重な経験だったと言える出来事を今回この文章で書こうと思います。

私たちボランティアメンバーはサンクラブリーにあるバンブースクールとブルースカイホームを訪れました。そこには幅広い年齢層の子供たちが居ました。しかし、その子供たちはただ可愛いどこにでもいるごく普通の子供ではありませんでした。その子供たちの 9 割は無国籍の子供達だったのです。私は子供たちの様子を見る限りでは国籍が無いなんて決して思えませんでした。なぜなら、 子供たちの表情には笑顔があったからです。 しかし、そんな子供達が生活している学校や家は私たちの想像をはるかに超えるものでした。学校は日本のように窓はなく、サイズが合っていない机を使い床に座って勉強をし、建物の状態も決していい状態ではありません。さらに子供たちの家は学校から片道 1 時間半ほどの場所にあり、その家はジャングルの中にあるため、子供たちはその家から学校に通うのが難しく学校で寝泊まりしているという話を聞き私は耳を疑いました。そこで私達は子供たちが生活をしている家はどんな感じなのか、見に行くことになりました。その時は雨が激しく降る中道はぬかるみ前に進むのがやっとでした。決して通学路とは言えない状況の道を私は息を切らしながら歩き何度も転びながら進んで行きました。こんな道を普段から歩いていると思うと本当にすごいと実感させられました 私はそんな道を歩いている時に一緒に歩いていた子供達や現地の大人の人たちが初対面の私に何度も手を指し伸ばしてくれました。こっちの道の方がいいよ、手を貸してと何度も現

地の言葉で私に訴えてくるのです。私ははじめ、全然何を言っているのかわかりませんでした。しかし、その人たちの表情や行動から私を助けようとしているとだんだんわかり、何度もその言葉に助けられました。　こんな見ず知らずの私を何度も助けてくれた子供達がこんな道を歩きながら通学をしている思うと私は色々な感情が入り混じってしまい到着の時には抑えきれなくなり涙が止まりませんでした。その時に思ったのです。今までの生活は決して当たり前じゃないということを。当たり前ってなんだろう、今まで思っていた当たり前って何だったんだろうと自問自答の繰り返しでした。そんな自問自答の答えの正解は今回のタイボランティアで見つけることはできませんでした。しかし、今回の出来事はそんな疑問を考えられるきっかけとなりました。タイの子供達、文化や言葉、あらゆる事は私にとって刺激的な経験の一つでり、忘れることはないと思います。このような機会を設けてくださった教員をはじめとした今回のボランティアに一緒に参加した仲間には本当に感謝しかありません。特にボランティアメンバーには沢山助けられました。つらいことがあっても笑い合える、心から言い合える仲間がいたことは私にとって大きな支えとなりました。今回のタイボランティアで出会えたすべての方々に心から感謝しています。また大人になって大きくなったタイの子供たちと出会うことができるように、これから先沢山の高校生がこのボランティアで新たな学びを見つけることができるようにと願っています。

　最後に本当にタイボランティアに参加できてよかったです。ありがとうございました。

「幸せとは」

遺愛女子高等学校　３年 上貞友鶴

私はこのタイボランティアを通してたくさんの貴重な経験をし、自分の考え方が少し変わったような気がします。タイボランティアに参加する前は、無国籍の子供たちと日本の遊びをして仲良くなりたい、楽しみたい、笑顔を増やしたい、という安易な考えがありました。しかし、実際にバンブースクールやブルースカイホームを訪れてみると、そこは自分の想像とは真逆で、にぎやかで笑顔溢れる子供たちばかりでした。どんな状況でも全力で楽しんでいました。

私は折り紙・歌・ダンスチームでした。メンバーのほとんど学校がバラバラだったため、何度か zoom や電話を通して話し合いを重ねました。しかし話し合いをしても、上手くいかなかったらどうしようと不安が募るばかりでした。実際に教えてみると、私たちの想像とは裏腹に、積極的に作り方を聞きに来てくれて一生懸命覚えようとしてくれたり、出来上がった作品でいっぱい遊んでくれたり、それに私たちの名前を日本語で書いて、と持ってきてくれたりしました。彼らは私達が抱えていた不安を一瞬にして吹き飛ばしてくれました。私たちを受け入れてくれる心の温かいタイの人々に出会えて心の底から嬉しく思います。

ブラザーからインターネットでは調べることが出来ないようなお話も聞きました。私は、ブルースカイホームにいる子供は家がジャングルにあって毎日通うのが大変だから近くに住んでいるんだなという認識でいました。しかし、それぞれにバックグラウンドがあって住んでいるということを知りました。日本に帰国してから、ブルースカイホームの子供たちとインスタグラムの DM を通して連絡をとっています。私の名前やタイで教えた日本語を覚えてくれていて、毎日「お姉ちゃんゆづ、おやすみ I miss you」とボイスメッセージを送ってくれます。ある日の夜には電話がかかってきて、「また絶対会いに来てね」と一生懸命英語で伝えてくれました。次会ったら何がしたい？と聞くと、「座ってお互いの好きな曲を聴きたい」という返信が来ました。決して高望みしないその返答に感化されました。絶対に叶えたいし、会いに行くねと口だけで終わらせたくないなと思いました。私は世界中の孤児を助けたいです。今の私には、何も支援してあげられるような力はないけれど、まずはタイで出会った 1 人でも多くの人を支援したいです。支援と言っても、募金ではなく物資を自分で届けにいきたいです。

このタイボランティアで人生の糧になる貴重な経験をしました。大雨の中ジャングルを歩いて支援物資を届けに行ったり、歴史ある寺院や僧侶に会ったりなど、どれも日本では滅多にできない体験をすることが出来ました。タイの食べ物や環境などすべてが新世界でしたが、住みたいと思うほど充実した日々を送ることが出来ました。私はこれから、目の前のことに全力で取り組み、何事にも感謝や思いやりの気持ちを忘れずに過ごしていきます。そしてまたみんなに会いに行きたいです。

「私の中で輝き続けるもの」

遺愛女子高等学校　３年 森未衣

約 10 日間のタイボランティア活動を通して特に感じたのは、決して忘れてはいけない人との出会いだったということです。日本にいたら決して出会うことのできない無国籍の子供達。彼らとの出会で幸せとは何か、自分がこれからどのような道を進むべきかなどを示してくれたような気がします。また、自己評価をも見つめ直すきっかけとなりました。私はタイでのボランティアを思い出すと涙が出そうになります。それは哀れむ涙ではなく、感動の涙です。短い時間の中で子供たちからたくさんの愛情を受け取りました。そして子供たちは自分たちにたくさんの笑顔をもたらしてくれました。愛情表現をするのがとても上手く、言葉が通じなくても行動や表情で感情を表してくれ、決してマイナスなことは言わない彼らに心を打たれました。ブルースカイホームの子達は最後お別れする際に涙を流してくれました。その時私は、たとえ言葉や文化が違ったとしても心はきちんと通じ合えるという事を実感することができました。

バンブースクールでの気づきは、日本の子供たちよりも自由でアクティブな子供が多かった一方で、食べ方やゴミの捨て方に関して課題があることが分かりました。やはり同じアジアでも環境や文化の違いによって差があることを改めて感じました。私たちがそれぞれグループで考えてえていた活動は成功だったと私は思います。全てが予定通り行えたわけではありませんがみんなの反応はとてもよく、盛り上がれました。特に名札のアイディアは非常に反響が良かったと感じました。名札は名前を覚えるだけでなく、喋るきっかけとなり、他国の文字も学べるいい機会になったと思います。活動する中で改善点も見つけることができたので次回同じような活動に参加する時には、子供たちの将来に少しでも良い影響を与えられるよう、より良い活動を目指したいと思います。

現地であった日本人である片岡さんは私に大きなヒントを与えてくれたような気がします。私も片岡さんのような活動を将来行うことを考えていましたが何をやれば役に立つのか、何を求められてるのかというのが明確ではありませんでした。そこで片岡さんの話を聞いた際にその場にとどまれる産業をつくり、家から子供達を学校に通えるようにしたいとおっしゃっていました。そうすることで子供たちが安全に学校に通える環境が整い、教育の質も高まって行き、長期的な持続可能な発展にも繋がっていくのではないかと思います。これはタイに限らず他の地域にも反映できると考えています。

私はタイの子供たちとお別れをする際、心に決めたことがあります。絶対にまた同じ場所を訪れると。遠く離れたタイの地で触れた人々の温かさや、知らなかった文化に触れた経験は私の人生に深い影響を与え、大きな財産となりました。そして、子供たちと再会することが私の人生の目標の一つとなりました。

「タイボランティアを通して」

旭川藤星高等学校　３年　田村美月

北海道から南西へ５２４０km、ミャンマーの国境付近にある Bamboo school に行き、無国籍や親がいない子どもたちへの支援、国や人種を超えた交流をしてきた。新千歳空港から８時間のフライトを終えて初めてタイに足を踏み入れた。外気の蒸し暑さと車内のキンキンに冷えている空気を感じ、とうとう私はタイに来たのだと実感した。バンコクからカンチャナブリ、そして Bamboo school へと２日目は移動をした。初めてレストランで食べた本場のタイ料理たちは辛さから甘みへの移り変わりが緩やかで優しさを感じた。

約１週間 Bamboo school のすぐ近くにあるホテルに滞在し Bamboo school や Blue Sky の方々と密に関わった。日本の文化を伝えるクラスで私の班ではお好み焼きとホットケーキを作り食べてもらった。子どもたちの目は光り輝いていて美味しそうに食べてくれるその姿に心が暖かくなった。また、この２品を大量に作っていく中で仲間の新たな一面が見えたり、チームワークも良くなっていったのが身を持って感じられた。

翌日はジャングルを Bamboo school や Blue Sky の子どもたちと歩き、ジャングルの中で暮らす家庭に衣類や食料品などの生活用品を届けて回った。道中は比較的緩やかな山道ではあったが、 雨によって滑りやすく少々危険な道だった。北海道の雪道を歩くように足を上げ上から地面を押し付ける感覚で歩くことによって滑りづらくなるということを学んだ。歩いている途中に雨が降ってきて楽しいだけではなくなった頃、子どもたちが荷物を変わって持ってくれたり、ニコッと笑ってくれるだけで頑張ろうと思えた。同じ言語や言葉を使いコミュニケーションを取ろうとしなくてもジェスチャーや笑顔でいることによって人とコミュニケーションが取れたり、距離を縮められるということも学んだ。その後も箒作りやバレーなどのアクティビティを通して純粋でひたむきな姿勢に触れ合うことができた。子どもたちとの交流で心に残っているのはレモンの木を植えたことだ。これは私たち タイボランティア１期生 が行った支援の一環で、このレモンが無国籍や親がいない子どもたちの生計を少しでも助けたり、このレモンを見るたびに私達との交流を思い出して笑ってくれればそれ以上の幸せはないと思う。また、レモンの木を植える作業の中で「マナオ」（タイ語でレモンという意味）というニックネームをつけてもらったあの一瞬の出来事は忘れられないし「マナオ」を大事にしていきたい。

１１日間のタイでの滞在やボランティア活動を通して、行動してみることで見える景色があるということを実感した。このボランティアに参加しなければこんなにも一生懸命に生きている人や同じ空を見て夢を語り合える大切な友人には出会えなかっただろう。

「教科書にないもの」

函館ラ・サール高等学校　３年　佐藤達三郎

現地の学校の子供達と。
一緒に山道を歩き、Ok? Ok と話すだけでも、話さずにいるより相手に受け入れてもらえる。

タイボランティアに参加する目的の一つとして「幸せとは何か」という文言を参加志望の際提出する文章に書いていた。笑っていることが幸せ、1 人でいることが幸せ、お金持ちである事が幸せ。人それぞれが幸せの基準を持ち、それが間違いであると他人は言えないだろう。

今まで私にとって幸せとは「金銭的に裕福な生活が送れる事」だった。要は、お金持ちは幸せだという意見だ。だからこそ、初めて現地の子供達と関わった時は驚きだった。彼らと交流する時(私は彼らの名前をカードに日本語で書いてあげていた)、一瞬でさえ哀れと思うような事はなかった。彼らは私達を歓迎し、私達の企画(料理、ダンス、折り紙など)に喜んで参加してくれた。そんな彼らは幸せそうだったし、私も幸せだった。なぜ彼らとハイタッチするだけで、顔を合わせて笑顔になるだけでこんなにも幸せなのか。

ダンスを見せ合ったりもした。言葉以外でも交流の方法はいくらでもあると感じる。

あるタイの児童養護施設での交流の最終日、箒作りや畑仕事などの体験で、私の面倒をつきっきりでみてくれていた女の子に、感謝の気持ちを込めてトートバッグをプレゼントした。彼女は喜んでくれたし、それを見て私もあげて良かった、と思っていた。その時、小さなショルダーバッグをお返しに貰った。それは彼女がいつでも身につけていた物で、きっと沢山の思い出があるだろうし、簡単に人にあげられるような物ではない事は想像できた。

レモン畑作り
私たちにとっては体験でも、彼女たちにとっては生計を立てるための「仕事」だという。

しかし、彼女は何の躊躇いもなくそれを私に手渡し、私にありがとうと言ってくれた。それは自分にとってこのプログラムで一番大切な思い出であり、一生忘れられない繋がりのようにも感じる。学校の勉強でこんな経験が出来るわけが無い。施設の先生方やブラザーに、「あなたは何故このような場所に身を置くのか」と聞くと「貧しい人々に寄り添うことが好きなんだ」という話をする。キリスト教の教えからくる考えだけでは無く、本心からそう思っているように見えた。色々な方の話、そして今回の経験から、私にとって幸せとは「人に出会い、寄り添い、感情を共有すること」という結論に至った。言葉は通じなくても笑顔に笑顔を返すだけで、それは幸せな空間になるのではないだろうか。笑っている人を見れば笑いたくなるし、泣いている人を見れば泣きたくなるような人間が、シンプルだがとても良い生き方だと感じる。どんなグループの中でもこの事は通じると思う。人は関わったことがない人に対して噂などから「あいつとは関わらないほうがいい」と境界をつくってしまう。生まれた瞬間は互いに何もないのに、人種、性別、貧富などから偏見を生んでしまう。出会った時は互いに何も境界が無いはずなのに、いつの間にか進んで関わらないことを選ぶ。誰にでもそんな経験はあり、もちろん私にだってある。それを少しでも無くしていくことが今の私に出来ることだ。

「タイでの活動を終えて」

函館ラ・サール高等学校　３年　鈴木蓮

約 10 日間の活動を終えて何かを学んだという感じは今のところはない。ただ、最初に自分が書いたところに誤謬はなかったなと思う。ちょうど物事を考えるのにはうんざりしていたので今回の活動でとりあえずやってみよう、とある程度行動出来たのではないか。

振り返ってみれば、高校三年生のこの時期にこの活動に参加することに全く抵抗がなかったのも、活動の中で焦燥感を感じずにただ、ひたすらにこなすということにシフトできた一因ではないか。

そして、今まで考えていたことや読んでいたことというのが一旦収束していった。だから、自分とは全く別のところで流れているいくつかの文化というものが目の前であるいは身体を抜ける感覚というのは何かしらデジャヴだった。それを僕は美しいと思うことは無かったしノスタルジーにもっていくことも出来る限りしないようにしていた。笑顔というコミュニケーションの手法、言語が実際にあり得るというのを幾度となく経験した。特に、小さな子供であればあるほど笑い合うだけで繋がりを得たような気になることが出来るのは、本当にこれで良いのだろうか、という戸惑いと共に感覚的にストンと腹に落ちるものがあった。その意味で人と人との繋がりを見たか、と問われれば自信を持って是とこたえることは出来ないけれども、否とは言わずに済むと思う。

メンバーの雰囲気もさいごにはだいぶ良くなったのではないか。人のことはよくわからないし、おこがましいので分かろうとすることもないけれど、腹の探りあいのようなことがあるのも一つの他者への配慮と言えよう。ラ・サール生は、皆ある程度知った仲なのでまとまることが出来たことに、疑いはほぼないがどれだけその枠を越えられただろうか。そして、あるいは男女というところをどれだけ越えていけただろうか。ジャングルの中を歩き回ったり、一日でハードスケジュールをこなしたりしたが、必ずしも女性の方が弱いということはなかった。疲れるということ、ホッとするということはそれ自体何かしていた証なのだから、それで全てだと思う。何かを手に入れようと躍起にならず、手を下に向けることが出来ていたことが良かった。

とにかく、僕には愉快な経験だった。そうでなければならないとも思う。僕らは最初から帰って行くことを予定されていた身なのだから、それ以上を求めるのならば当然それ以上の代償を払わされる。少なくとも僕は肌ツヤでは現地の人にかなわないと思った。それが自然に近い生活をしているからなのか、人種に起因するのか、わからないが、死んだ目でくたびれた姿よりはよっぽど魅力的だった。

「『普通』の価値」

旭川藤星高等学校　2 年　北畑奏音

私は今回タイボランティアに参加するにあたって、SDGs の目標のひとつである、「誰一人取り残さない」を自分の将来の活動に繋げるため、現状を知ることを目的としていました。

バンブースクールで見た光景は、私の想像と異なっていました。無国籍の子ども達の、溢れかえる笑顔と優しさ。はじめにそれを感じた時、その温かさにとても驚きました。私達と変わらない。友達と一緒に勉強して、笑って話す。ただ、国籍がないだけ。

たくさんの発見と体験をした中で、とても印象に残ったことがありました。一緒に遊んだ小さな子ども達は、とてつもない元気の良さと、賢さと、優しさを兼ね備えていました。私達のことをどう思っていたかは分かりませんが、何日かを共にすごし、互いの表情と行動で、感情を共有し合えたことがとても嬉しかったです。

一方で私達と同世代の女の子が集まるブルースカイホームの子達は、時折困難と苦痛を、必死に思いやりで覆い被せようとしているように見えました。ブルースカイホームの子達と別れる時、現地のブラザーが話していた「ここができた経緯」や「子ども達の生い立ち」を聞き、英語がわかる子達が涙していたことに気づいたからです。

食べ物や衣服が手の届くところにある環境に恵まれ、安全な水と共に生きられる人々と、爆弾や地雷が埋められる地で生きるだけで精一杯の生活を送る人々。生まれた環境でこんなにも違いが生まれるということに、虚しさを感じました。

ブルースカイホームで、同い年の女の子と話しました。私と彼女に共通することは、夢中になれるほど好きなものがあることです。スマホを持っている子達は、画面の向こうの好きなものに夢中でした。好きな歌手やアイドルのライブに行きたい。イベントに参加してみたい。その願いは、彼らにとって遠い夢です。どれだけ好きなものがあって、もしもお金が手に入ったとしても、国籍がありません。行きたいところに行けることがとても恵まれていること、今まで気にすることの少なかった「国籍」というものが、彼らにとって重い壁になっていることを知りました。

私がタイボランティアの一員として、今回やるべきことをできたかはわかりません。ただ、今の私には、将来彼らの夢を実現できるよう施すこと、命を追われず安全に暮らせる人々が増えるよう手助けするため、現地に行かなければ得られない情報が必要でした。タイに行って得た知識と経験は、必ずこれからの活動の糧になると確信しています。

そして、出会いから出発までと、タイでの 11 日間を共に過ごし支え合えた仲間と、数え切れないほどの実りのある時間を共有することができました。

最後に、暖かく迎えてくれた現地の方々、ずっと車を運転し案内してくれたブラザーには感謝でいっぱいです。また、今回のタイボランティアを計画し支えてくださったたくさんの皆様、現地でたくさん助けてくださった方々、本当にありがとうございました。

「５３５枚のなかで」

旭川藤星高等学校　2 年　佐藤 葵

535 枚。11 日間でとった膨大な数の写真の中には、日本で過ごしている時とは異なった「幸せ」がありました。不安で重かった足は、帰りには充実感と名残惜しさで重くなっている。タイで過ごした時間は、私の持つ価値観を大きく変えてくれました。初めての海外に、聞きなれない言葉。そして設備の違いに、混乱していました。「この国では、これが普通なのか」無意識に浮かんだ哀れみ。水道水は飲めないし、トイレに紙は流せない。その時私が実感したのは、「日本の豊かさ」。どれだけ恵まれた土地にいるのかを、痛感したのです。しかし今考えてみると、そのように感じたのはきっと、価値観の違いによるものなのだと思います。

私が最初に「豊かさ」を感じたのは、バンブースクールの子ども達と交流した時でした。人が詰め込まれたバスの中に、私達も半ば無理やり入り込む。彼らにとって私たちは、確実に「異質」であったと思います。それでも、不思議がるどころか、興味を持ってくれる。初対面であるはずなのに、笑顔を見せて、抱きついてくれる子さえいました。言葉は通じないし、文化も違う。それでも私たちに愛情表現をしてくれる彼らは、私に多くの「幸福」を分けてくれたように思えます。

一方で、ほとんどが中学生～高校生にあたる年齢の女の子が集まるブルースカイホーム。家族から見放されてしまった子や、孤立してしまった子。中絶ができず「生まれてしまった子」や、事故に遭った子。帰る家を失ってしまった子たちは、学校の施設で暮らします。私の認識では、その施設は、「寮」でした。しかし、そこに住む女の子の一人であるラーマイマイは、建物を、「Home」と呼んだのです。彼女たちは、至って普通の女の子たちでした。私が勝手にレッテルを貼っていただけで、ブルースカイホームに通う女性は皆、私と変わらない学生。事前知識だけで彼らの間に境界線を引き、余計なことばかり頭に浮かんでいた私にとってその事実は大きな衝撃であったと同時に彼らと親しくなるきっかけにもなりました。

今回の活動で得たのは、新たな「幸せの基準」。インターネットで得る娯楽、趣味で得る幸せ、SNS で通じ合う楽しさ。それらも確かに「幸福」です。しかし、私はタイで、それらを凌駕する「幸福」を得ました。言語は通じないし、宗教の違いもある。それでも、人は理解し合える。相手の気持ちや、言いたいことを理解した瞬間の喜びは、国内では味わえなかったと思います。カタコトの英語で、懸命に会話をする。容易ではなく、上手くいかないこともありました。しかし、その失敗を笑い合いながら認め、受け入れてくれる。その瞬間が、私にとって今まで感じたことのない程幸せでした。

私は教師を志しています。それと同時に、「植えたレモンを見に戻る」という目標もできました。今回の活動は私に、幸せと同時に、人生においての目標も与えてくれました。

「TEAM OF 13」

函館ラ・サール学園高等学校　２年　岩本勝太郎

「チームでボランティアに行きます。あなたのような考え方では困ります。あなたの志望動機の作文は最低でした。」え？なぜ？突然頭を叩かれたような、私の人格や夢までも全否定されるような屈辱感、私のタイボランティアはこんな最悪なスタートから始まった。そこまで言われて、行く理由などない。辞退したいと言う私に両親は、「ギリギリでも行けるチャンスを掴んだなら行って自分が納得するボランティアをやってきたら？きっと理想と現実は違うな。行かないとわからないよ。たくさん恥をかいて、たくさん経験をしておいで。チームでね。」でもまだ納得いかない。なぜならば、このタイボランティアは中学の時から行ってみたい、私に何ができるだろうかと考えていた。そして私こそが行くべき人材だろうとも思っていた。そう、私は自信があった。昨年夏、日本の高校生代表として途上国へ行き、世界レベルの支援、援助、ボランティアを視察させてもらった。そして私もこれから社会に貢献できるように勉強しなければならないと考えていた。志は誰よりも高いと思っていた。今思うと何もできないくせに自惚れていたのかもしれない。しかしまだ納得いかないままタイに到着。高校生男女混合 13 人のチーム。不安は微塵もない。気合いと期待のみ！渡航前に何度もミーティングやプレゼンテーションを重ね、下調べ済みだったが実際は想像以上だった。環境、貧困、子供たちはさまざま理由で国籍を持たない。毎日道なき道を歩いてラ・サールバンブースクールへ通う。また女性を守るための宿舎ブルースカイホームでは雨の中、ジャングルを全員が手で荷物を持ち物資を運んだ。11 日間という限られた時間だったが、彼らの立場、環境、気持ちを考え、寄り添うことができた。

最終日、他国のボランティアチームが大量の食料、飲料、現金を持ってきた。豪華な食事も。もちろんありがたいことだ。これもボランティアだ。しかし私たち高校生にはそんな事はできない。私たちにできること、言語の壁はあるが子供たちに興味を持ってもらう工夫をし、日本の文化を伝え、日本食をみんなで作って食べ、ソーラン節を踊り、腕相撲をしたり私が幼い頃に遊んでいたオモチャを持参し遊んだり高校生ならではの対面通行のボランティアがやれた。11 日間 13 人の完全燃焼のチームボランティアだった。どうやら渡航前の私は、ひとりで出来もしない一方通行のボランティアを考えていたようだ。今、帰国から１週間。タイで出会ったすべての人たち、出来事を思い出す。今回出会った子供たちは悲しいバックグラウンドを背負っているのにとびきりの笑顔で慕ってくれた。そして私たちもそんな彼らのバックグラウンドなど忘れて、関係なく接した。まるで自分たちの妹や弟のように。彼らには国籍がない。だから彼らは今他国にいけない。しかし日本に興味を持って、いつか日本に行きたいと思って、私たちを思い出して、成長して国籍を取得してぜひ日本に来てほしい。私がタイで成長させてもらったように、彼らも他国に行きたくさん経験をし成長してほしい。この夏 17 歳の私が大切だと気づいたこと。大きなボランティアはできないが、私なりにできるボランティアを模索し、相手の立場、環境、気持ちを理解し、考え、そして寄り添うこと。ひとりでやれることは限られている。仲間を大切にし、信じ、議論し、挑戦する。きっと未来は大きなボランティアにつながるはずだ。

「タイで学んだこと」

函館ラ・サール高等学校　２年　奈良敢太

今回タイボランティアに参加して、気づいたことは、「人は全世界同じなのだ。」ということです。

ボランティアに行く前に、国境を越えてバンブースクールに通ってくる子供達はどんなことを考え、何を目的にして生活しているのか興味を持ちました。日本と比べて環境が悪いため、子ども達にも笑顔などないのではないかという思いや、年齢の離れた子とどのように接すればよいか等の不安もありました。それでも同じグループのメンバーと、現地でどのような活動をするかを話し合い、私たちのグループは日本文化を伝える目的で、折り紙を行おうと計画しました。

まず、言語が通じないためジェスチャーやイラスト、大判折り紙を使っての視覚的説明を中心に準備しました。作ったもので遊べるようにと、紙飛行機や牛乳パックを使ったパッチンガエルを計画しました。グループのメンバーは皆離れた地域だったので、ズームを利用して万全の準備をしていきました。

実際現地へ行って最初に驚いたのは、たくさんの子どもたちがいたことです。皆年齢もバラバラで、下は幼稚園位から上は中学生位までが通ってきていました。学校の設備などは日本と比べ物にならないくらい簡素なものでしたが、皆元気で笑顔にあふれ、楽しそうだったのは、日本の学校と同じだと感じました。笑顔がないといった私の思いは、良い意味で裏切られました。折り紙を知っている子や紙飛行機を折れる子もいて意外でした。どの子もできた紙飛行機を飛ばしたときに、とびきりの笑顔だったのが印象的でした。

また、学校で英語を話せる子がいたことにも驚きました。しっかり勉強をしている姿を見て、日本の何不自由ない生活に甘んじている自分が恥ずかしくなりました。

プログラム後半には、ブルースカイホームの人達と箒作りをしました。難しかったのですが何度も助けてもらいながら完成させることができました。私達の年齢と同じくらいなのに大変手際よく、また女性なのに力の必要な工程を難なくこなす様子を見て、私はなんて無力なのだろうと痛感しました。

私は冒頭で、「人は全世界同じだ」と書きましたが、根本は同じでも国や環境によって大きな格差が生じ、人生は決して平等ではないことを身をもって知ることができました。今回のボランティアは、「現地の人のために」ということに加えて、自分も現地の人々から学んだことも数多く、少しだけ成長できた大変貴重な経験となりました。一人の人間として、これから自分に何ができるのかを考えるきっかけにもなりました。その答えはまだ出ていませんが、少なくとも同じ人間同士で支え合い、格差のない世界（社会）に向けて、微力ながら私ができることを模索していこうと考えています。

「タイボランティアを終えて」

函館ラ・サール高等学校　１年　皆山雄太

今回のタイボランティアの中で私が特に心に残ったものは大きく分けて二つあります。一つ目はバンブースクールやブルースカイホームの子供たちが終始元気一杯で親切だったことです。このボランティアが始まる前からバンブースクールで生活している子供たちの 95%が国籍を持っていないという話はタイに行く前から韓先生がおっしゃっていました。それを感じさせないほど子供たちが元気で、また後でも話しますが、こちらがどう説明するか決めあぐねている際に教えてくれたりと、とても親切だったことは強く印象に残っています。また、英語ならある程度は通じたことです。

最初は言葉は何も通じないという話だったので、どのようにコミュニケーションを取るか考えるのがなかなか難しかったですが、現地についてバンブースクールの子供たちの中には多少は英語が通じる人がいることを知り、言葉を教える時などには英語を使うことでなんとか会話することができました。またこれは今回の反省点になりますが英語が通じるならもう少し練習しておけばよかったなと思いました。そして何より衝撃的だったのは国籍のない子供たちはカンチャナブリより東にはいけないことてです。ある日本のアニメが好きなバンブースクールの子が、いつか日本にも行きたいといっていたことがあるのですが、私は「すぐにでも来れば良いのになと内心思っていましたがそのあと韓先生がブルースカイホームに行く際にあった検問で無国籍の人は出国はおろかカンチャナブリより東にはいけないというタイの中ですら移動を制限されている状況だということをおっしゃっていました。このような状況はすぐにでも改善すべきだと思いますし、どのようにして変えていけば良いのかを改めて考えました。

二つ目はタイと日本の文化の差です。私達は 29 日にブルースカイホームの子供たちと一緒にレモンの苗を植えたのですが、その際に堆肥の匂いが強烈で眩暈がしてくるほどだったのですが、子供たちは涼しい顔で堆肥を運んだり撒いたりしていたため、これが彼らにとっての当たり前なんだ感じると共に自分達が普段いかに楽な環境で生活しているのかを改めて考えました。また彼らの覚えの速さにも驚かされました、バンブースクールやブルースカイホームで折り紙を教える際に、彼らに一度教えると一発でまるで見本のようなとても上手な鶴や紙飛行機を作っていました。宿での生活については、私は今回のボランティアはバンブースクールにて子供たちと一緒に生活すると考えていたのでそこまで苦ではありませんでした。

今回のタイボランティアを通して私は幾度も自分のあたりまえが、他の地域や国では通用しないということを何度も思い知らされました。そして私は海外旅行が初めでだったこともあり他国の文化についての理解を深めることもできました。このような経験は今後の人生において非常に重要な経験だと思います。また、酒井先生がおっしゃっていたように私達はタイボランティアの最初のメンバーなのでぜひ来年のフィリピンボランティアや再来年のタイボランティアにも参加して、今回培っ

たノウハウをあとの世代に残していければなと思います。

「私が学んだ二つのこと」

函館ラ・サール高等学校　1 年　永坂慎一郎

タイボランティアを通して、私は二つのことを学びました。一つは、人と人の繋がりです。私達が訪ねたミャンマー国境付近のバンブースクールやブルースカイホームの子供達には、国籍がありません。私は、これまで自分の国籍について考えたことなどありませんでした。日本人であることが当たり前で、学校へ通うことも疑問に思ったこともありませんでした。これまで不自由なく生きてきた私達にとっては、彼らが置かれている環境は、とても過酷なものであることを実際にこの目で見て実感しました。私が最初に感じたことは、いかに自分達が恵まれた環境の中で豊かな生活を送っているということでした。しかし、その感情は現地の子供達と実際に会って、様々な交流を通して、触れ合うことで少しずつ変化していきました。まず、全く言葉が通じない子供達とも遊びやスポーツ等で通じ合うことができることを知りました。それどころか。彼らは、私達と過ごす短い時間を本当に心から楽しんでくれているようでした。私が思っていた日本人が恵まれているというのは、物質的なことであり、必ずしも＝幸せとは言えないのかもしれません。彼らは、決して物質的に満たされているとは言えませんが、私達よりずっと、毎日の一瞬一瞬を一生懸命に楽しんで生きているように見えました。彼らの楽しそうな笑顔は、私達の心を豊かにしてくれた気がします。ボランティア活動とは、困っている人を助けたり、何か必要なものを与えるものだと思い込んでいましたが、実際はお互いに与え合うものなのかもしれません。人と人の繋がりを通して、相手を思いやることで、国籍も性別も年齢も超えて、助け合うことができるとわかりました。

二つ目に、無力さです。私達の活動には、子供達との交流以外にも、レモンの木を植えるなど、持続性のある活動も行いました。しかしながら、彼らがバンブースクールやブルースカイホームを卒業してしまった後までは、一人一人へのサポートを継続することが難しいという現実があることも知りました。私達には、来年、再来年、数年後のことは当たり前にあり、それをどうゆうものにするかは、ほぼ自分たちの意思や行動によって左右されます。しかし、彼らは違います。どんなに高い志や目標があっても、それを実現するための環境がないのです。そして、その犠牲になるのは弱い立場である子供や女性なのだということも知らされました。

最後に、タイボランティアに参加したことで、普通の生活をしていたら訪れることも出来ない場所に行くことができ、また出会うこともなかった人たちと交流することができ、人との絆を感じることができました。その一方で、彼らの将来への不安が残ったのも正直な気持ちです。私達ができることは、本当に小さく無力に感じてしまいます。ただ、何もしなければ何も変わりません。この経験を活かして、次へと繋げていくことが私達の持続的な役割なのかもしれません。実際に現地に行って、見て体験した私達だからこそ伝えられることがあるはずです。一人でも多くの人達に伝えていくことで、助け合う気持ちの輪を広げていきたいです。そして、こうゆう活動に興味を持ってもらいたいです。私達の小さな一歩は、いつか必ず大きな変化へと繋がると信じています。

「国単位でやらなければいけないこと」

函館ラ・サール高等学校　１年　武藤悠真

私は札幌司教区が主催する、タイボランティアに参加しました。タイボランティアに参加した理由は、２つあり１つ目はフィリピンのストリートチルドレンの現状を知って、それと近しい現状をこの目で見るためと、２つ目は今までの何かイベントに対して消極的な自分を変えたくてタイボランティアに参加しました。タイボランティアで学んだことは色々ありますが一番心に残ったのはバンブースクールやブルースカイホームでおこなっている活動で、体験した中で一番心に残っているのはブルースカイホームの子と行った集落です。まずバンブースクールやブルースカイホームでやっている事に関してですが、両親がミャンマー人で子供がタイで生まれると国籍(ID)がない、その子供達に対して教育を施し中学、高校と進学しタイの国籍を与えるための最初のステップである小学校を危険ということをわかっていながらミャンマーとの国境付近につくるそのこと自体が素晴らしいと感じました。また、同時にバンブースクールやブルースカイホームにはまだまだたくさんの子供達がいてまだ支援が必要な状況なのだなと改めて思いました。そしてブルースカイキッズと行った集落では泥の道を歩いて 1 時間の距離に集落があり日本ならアスファルトで舗装、最低でも砂利道だと思うのですが舗装がされていなく川に橋と言えるような立派な橋はかけられていなく、日本の当たり前が海外では違うという事を目の当たりにしました。またこの不便な集落に何十人もの人が生活を営んでいる事にも日本との違いを感じました。そしてその集落に毎月欠かさず支援物資を届けに行っているという事にも驚きを感じ、人の暖かさに感動しました。タイの人は初対面でも優しく接してくれ、タイにいる間気持ちよく過ごす事ができました。例えばスティーブンさんというブラザーはコンビニで現地のお菓子を買ってくれたり、名前を覚えてくれたり、像に乗る時も積極的にコレやってみたら？と聞いてくれたり、現地の人にアポとってくれたり、言語が違うのに話しかけてきてくれたり、あとはタイのお祭りの屋台でお肉を買った時にタイ語で thank you は、コープンカーップって言うんだよと懇切丁寧に教えてくれたり、現地の人の暖かさに感動しました。 最後に私は、バンブースクールの事業もブルースカイホームの事業も恵まれない子供達のために、全世界に広げていがなければならないと感じました。

「第１回タイ・ボランティアを引率して」

函館ラ・サール高等学校　教諭　酒井　亮

タイとミャンマーの国境付近に「バンブースクール」という無国籍の子供たちに教育を施しているカトリックの学校があることを教えられたのは、2016 年に参加した第１回フィリピンボランティアの時だった。この時訪れたフィリピンの貧困層を抱える学校とバンブースクールの大きな違いは、貧困だけでなく、民族や無国籍という問題に加え、英語がほとんど通じないということ。この地で活動するにあたって、分からないことだらけでスタートした札幌教区主催の第１回タイ・ボランティア。今回参加してわかったこの地域の現状と高校生ボランティアの奮闘、そして成果の一部をお伝えできればと思う。

無国籍の子供たちの背景

タイ、ミャンマー、ラオスの国境の山岳地帯には、カレン族やモン族少数民族が「国境」を意識することなく暮らしていた。現在も陸続きの国境であるために簡単に「国境」を越えることが可能で、日常的に国境を越えて通勤や通学をしている人もいる。

近年、タイはメコン地域の経済を牽引している一方で、少子高齢化や労働者不足を抱えている。周囲には、めぼしい産業もなく雇用も少ないミャンマーカンボジア、ラオスが取り巻く。経済の格差は移民労働者問題を生み出し、相互に依存している部分もある。

タイにおいて、「誰をタイ人とするか」と「国籍法」は、近代化の過程で変遷を繰り返してきたが、現在は原則的に「出生地主義」を取っている。一方、ミャンマーの「国籍法」は「血統主義」で、例えばミャンマーと外国人の間の子供やミャンマー以外の場所で生まれた子供に対してはミャンマーの国籍は与えられない。

タイ政府に登録されている移民労働者数は全体で 290 万人。だが、未登録者が同数いるとみられ、実際には 580 万人が陸続きの３か国からの移民労働者と考えられている。その中で、不法労働をする家族のうち、特にタイで出生した子どもが無国籍となるケースが急増している。親が不法に入国しているためにタイ国籍が取得できないからだ。さらに、両親が母国の国籍も持っていない場合もある。どちらの場合も両親の大半は、タイに長く暮らしているが、子供の出生や国籍を証明する「住民登録票」がない。病院ではなく、きちんとした住所のない山の中で出産し、タイの役所に出生届を出していなかったために「出生証明書」すらないためだ。これらの子ども達が、就学することは非常に難しい。さらに親が帰国することになると、育児放棄を余儀なくされることも珍しくないという。

バンブースクール・ブルースカイホームの設立

私たちが訪れたタイとミャンマーの国境付近のサンクラブリー周辺は、高校卒業の資格があれば大企業とまではいかないまでも、一般的な就職口はあるらしい。しかし、無国籍の子どもたちは、教育を受ける環境がない。また、あったとしてもゴム農園に従事する家庭は、数年ごとに移動してゴムの栽培を行うために、継続しての就学が困難だという。

教育を受けられない子どもたちは、仕事にありつけず、生活のためや貧困から抜け出すために、犯罪に手を染めたり、児童売春の被害にあったりするケースもある。

この地域におけるこれらの子ども達にベーシックエデュケーションを施すために、2008 年、バンブースクールが開校し、カトリックの修道会の支援を受け、「No Child Left Behind（どの子も置き去りに

しない）」の理念の下で運営され、ブルースカイホームという児童養護施設も開設された。タイでは彼らの教育は容認されているが、タイ政府による支援は受けていない。バンブースクールをはじとする各学校でも、国籍のない生徒たちに国籍の取得を支援しているが、手続きは困難を極めている。

この厳しい環境の中で、彼らに対して、どのような支援が必要なのか、また、日本人高校生ボランティアに何ができるかを考え、模索する機会を、カトリック札幌司教区の主催によって与えられた。次に、高校生の奮闘の様子を伝えたい。

バンブースクールでのジャパニーズクラス

日本での準備期間から、現地ではタイ語、ミャンマー語の他、少数民族の言語が使用されており、英語でのコミュニケーションがあまりとれないという情報は伝えられていた。言葉が通じない場所で、どのようにコミュニケーションをとっていくかが課題となった。

今までの札幌教区主催のボランティアでも、「日本の料理を作る」「折り紙」「よさこいソーラン節」などの「食」「遊び」「踊り」など、言葉を越えたところで通じ合える授業は経験しており、それは今回の生徒たちにも継承されていた。それがタイのバンブースクールで実施可能かどうかはわからなかったが、とにかく、実施できないものがあったとしても、自分たちの引き出しを増やして、Ａプラン・Ｂプランなどを準備し、できるだけ対応できるようにした。それは、食事においては「水や火が確保できるか、できなかったらどうするか。」という所にまで及ぶ。想像力が必要なため、高校生にとっては、ハードルが高いところもあったが、この準備のおかげで、7/27(木)におこなわれたバンブースクールの授業では、臨機応変の対応をしてくれたと思う。

その中で、今回、面白かった取り組みは「名札を作る」ということ。白紙の名札を作っていき、バンブースクール子供たちに名前を尋ね、それをカタカナで書く。また、日本人の名前を相手に伝え、相手の言語で名札をつくり首から下げて交流をした。

タイ・ボランティア引率の中心である韓徳先生は、日常的に外国人技能実習生の支援を行なってきた。その際、彼は一緒に活動している高校生に「技能実習生と支援者」ではなく「あなたと私」の関係が必要だと伝えているが、名札作りはまさにその関係を形成するのに非常に効果があったと思われる。その人の名前を知ることによって、子どもたちと高校生ボランティアとの距離が、「グン」と音を立てるように、いっきに縮まった。

ジャパニーズクラスを担当することによる異文化交流は、相互理解を深めるだけではなく、日本人の高校生ボランティアにとって日本の社会や文化を見直す機会となった。また、韓先生によって「動けば風が吹く」とくり返し伝えられていた通り、迷ったとしても、「とりあえずやってみる」という姿勢の方が、上手くいくことを学んだようだ。

現地での支援・ボランティア

7/28(金)のボランティアは、ジャングルの中に住む 14 の家庭に、修道会のブラザーとシスター、そしてバンブースクールに通う生徒、ブルースカイホーム(児童養護施設)の子どもたちと一緒に、支援物資の洋服や食料を届けること。タイは雨季。あいにくの大雨に、粘土質の赤土は非常に滑る。片道１時間弱、ここを通学路として通っている子がいること、ジャングルの奥の高床式の家での暮らしぶりを目の当たりにし、どのような支援が必要か、肌で感じた。

7/30(日)ブルースカイホームの子どもたちと、現地の生活の糧の一つである「ほうき作り」をおこなった。１本 60 バーツ(約 240 円)のほうきを作るために、どのくらいの手間がかかるかを実感した。ま

た、ブルースカイホームの子ども達と一緒に昼食を作るときに、お互いの名前を呼び合いながら、心が通じ合っていく様子は見ていて微笑ましかった。

8/1（月）今回のボランティアのプロジェクトとして、ブルースカイホームの横に「レモンの植樹」をおこなった。農作物の中では比較的高値で取引きされるレモンを、タイの子どもたちと日本の高校生が協力して植えた。このあと、ブルースカイホームの子ども達が、これを栽培することになるが、レモンの成長とともに、今回めばえた人間関係も育まれていくことだろう。

結びに

現地の問題は、その国の制度やしくみ、また隣国との関係などが大きく、個人の力ではいかんともしがたいところがある。しかし、やはり現地に赴き、現状を目の当たりにすることの大切さを実感した。それは「これから、何ができるかを考え続けて行きたい」というボランティアに参加した生徒の声にもあらわれている。私たちが若い世代も巻き込んで、これからのかかわりを考え、考える人数をさらに増やしていく。それらの人々が結びついて、社会を変える原動力となっていく。

この原稿を書いているときに、カトリック札幌教区の「平和旬間（８月６日～15 日）にあたり、教皇フランシスコが指摘した『無関心というパンデミック』に対し、『すべてのいのちを守るため』祈りのうちに連帯し、聖母マリアの執り成しを願いながら平和実現に向けて歩んでまいりましょう。」という言葉が目に入った。

参加者が無関心から脱却し、「No Child Left Behind（どの子も置き去りにしない）」というカトリックの理念に触れ、主体的に考え行動するきっかけをつくってくれた今回のタイ・ボランティア。その主催は「平和実現に向けた歩みの証」だと実感している。

2023 年 9 月 17 日発行

「タイボランティア 2023」帰国報告集

編集　札幌教区タイボランティア事務局
発行　札幌教区タイボランティア事務局
〒041-8765　函館市日吉町１丁目１２番１号
函館ラ・サール高等学校　TEL 0138-52-0365